

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第62輯

三ヶ山西遺跡

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第62輯

み か やま にし
三ヶ山西遺跡

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

三ツ山西遺跡が所在する貝塚市は、大阪府南部の泉州と呼ばれる地域に属しています。その貝塚市の奥部、三ツ山西遺跡の所在する木島谷と呼ばれる地域周辺は、和泉山脈から派生する低い丘陵と河川とに囲まれた田園地帯が広がり、また、行基年譜に記載されている『不積観音寺』などの文化遺産に恵まれた地域でもあります。

この自然と文化遺産とに育まれた地域も、近年になり、関西国際空港関連事業のひとつである道路建設及び京阪神経経済圏のベッタウン化による開発などに伴い、日々その姿を変貌させております。

三ツ山西遺跡の発掘調査は、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（通称大阪外環状線）建設に伴って実施されたものです。今回の発掘調査は、調査面積が小規模ながら、貝塚市奥部付近では極めて数少ない本格的な調査であります。

発掘した遺跡の調査成果については、本報告書に詳しく記述している通りであります、この地域では初現の6世紀末から7世紀初頭の遺構、中世における水間寺周辺の有り様を垣間見る事が出来る遺物などが検出されました。これら数々の貴重な資料は、今後、この周辺の歴史を知る上で、重要な手掛かりとなることと思います。

最後に、本事業を進めるにあたって御指導・御協力を賜った大阪府土木部・大阪府水道部・大阪府土木部岸和田土木事務所・大阪府教育委員会・貝塚市教育委員会・水間鉄道株式会社・地元三ツ松自治会・地元関係者各位に、深く感謝致しますと共に、今後とも本協会の事業に一層の御理解・御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成3年1月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 仁賀奈 裕吉

例 言

1. 本書は、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（通称大阪外環状線）建設予定地内に所在する、三ヶ山西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は2次にわたって行い、第1次調査を1990（平成2）年5月7日から同年7月31日まで、及び第2次調査を同年12月に調査課第2班技師 奥 和之を担当者として実施した。
続く整理、報告書作成作業は、発掘調査終了後1991（平成3）年1月31日まで実施した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部、大阪府水道部、大阪府土木部岸和田土木事務所、大阪府教育委員会、貝塚市教育委員会、水間鉄道株式会社、及び地元三ツ松自治会などの地元関係者各位の協力を得た。
5. 遺構写真撮影は調査担当者の責任で行い、空中写真は大阪航空株式会社、遺物の写真撮影は小倉 勝が担当した。
6. 本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準上色帖』5版（1976）によった。
7. 本書の執筆及び編集は、奥が担当した。
8. 調査、整理の課程で作成した図面類、写真、出土遺物等は当協会資料班において保管している。

本文目次

序文	
例言	
目次	
第I章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	2
第II章 位置と環境	4
第III章 調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 遺構と遺物	9
概要	9
ピット群	9
建物	13
溝状遺構	14
土坑	18
その他の遺構	18
第3節 第III層出土遺物	19
第IV章 まとめ	21
出土遺物計測値表	22
出土遺物計測値表凡例	22

挿 図 目 次

第1図	貝塚市と調査地点	1	第12図	148-OB平面・断面図	12
第2図	調査区位置図	2	第13図	149-OB平面・断面図	13
第3図	地区割図	3	第14図	第2調査区溝群平面図	14
第4図	周辺の遺跡図	5	第15図	1-OS遺物出土状況図	15
第5図	基本層序柱状図	6	第16図	1. 2-OS出土遺物	15
第6図	調査区土層断面図	7	第17図	溝土層断面図	16
第7図	遺構配置図	8	第18図	5-OS出土遺物	16
第8図	ピット断面図	9	第19図	土坑平面・断面図	17
第9図	第1調査区遺構対照番号図	10	第20図	第III層出土遺物1	19
第10図	ピット群平面図	11	第21図	第III層出土遺物2	20
第11図	77-OP出土遺物	12			

表 目 次

表1	遺物計測値表 1	23	表2	遺物計測値表 2	24
----	----------	----	----	----------	----

図 版 目 次

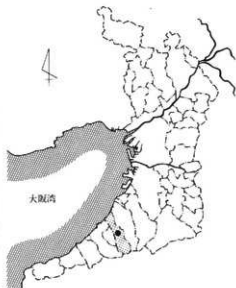
図版1	調査区空中写真	図版6	1. 1-OS遺物出土状況(南から)
図版2	1. 調査区全景(西から) 2. 調査区基本層序		2. 1-OS遺物出土状況細部(南から)
図版3	1. 第1調査区全景(南から) 2. 第2調査区全景(西から)		3. 5-OS遺物出土状況(16)
図版4	1. ピット群全景(南から) 2. 149-OB(89-OP土層断面) 3. 84-OP土層断面 4. 77-OP土層断面 5. 87-OP土層断面 6. 142-OP土層断面 7. 143-OP土層断面 8. 144-OP土層断面 9. 78-OP根石検出状況 10. 154-OP根石検出状況	図版7	1. 1-OS土層断面(南から) 2. 2-OS土層断面(南から) 3. 5-OS土層断面(南から) 4. 139-OS土層断面(南から) 5. 140-OS土層断面(西から) 6. 24-OO土層断面(南から) 7. 22-OO全景(東から) 8. 22-OO土層断面(南から)
図版5	1. 148-OB全景(東から) 2. 148-OB(54-OP土層断面) 3. 148-OB(58-OP土層断面) 4. 148-OB(93. 92-OP土層断面) 5. 148-OB(115-OP土層断面)	図版8	出土遺物1
		図版9	出土遺物2
		図版10	出土遺物3

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

三ヶ山西遺跡の発掘調査の経緯となった主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（通称大阪外環状線）は、大阪府枚方市と泉佐野市とを結ぶ道路として計画され、現在河内長野市以北までが開通し、河内長野市・泉佐野市間でも一部区間の供用が開始されている。

その路線内の調査は、1984（昭和59）年度以前には大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターによって数々の遺跡の発掘調査が行われて来た。しかし、それ以降は関西新空港関連の重要なアクセス道路としての位置付けがなされ、その関連事業にかかる文化財調査の一環として本協会により発掘調査を実施している。



第 1 図 貝塚市と調査地点

当該路線建設を進めている大阪府土木部は、今回水間鉄道の線路との交差点に道路建設に先立ち、地下埋設物の共同溝を敷設する計画を持った。しかし、当該地周辺は、本調査以前には全く発掘調査が行われていなかったため実体が不明ではあるが、三ヶ山西遺跡という周知の遺跡として認知されていた。そのため大阪府教育委員会は、大阪府土木部と遺跡の取り扱いについて協議を行い、まず、遺構・遺物の有無を確認するために1990（平成2）年3月に試掘調査を実施した。その結果、多量の中世の遺物及び遺構を確認した。その調査成果により大阪府教育委員会は大阪府土木部と再度協議を行い、本協会が1990（平成2）年度に発掘調査を実施することになった。

調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、1990（平成2）年5月7日に着手し同年7月31日まで、及び同年12月に実施した。

第2節 調査の経過と方法

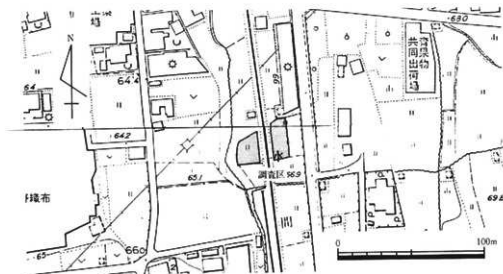
発掘調査は、調査区が水間鉄道の線路によって2箇所に分断されていることから、東側を第1調査区、西側を第2調査区と総称して実施した。

調査は、基本的に現代耕土については、機械掘削で除去した。その後、それ以下の層については、人力により層ごとに掘削し精査を行い、遺構の検出に努めた。

なお、発掘調査に関しては、本協会が定める『発掘調査規程』に基づき実施した。遺構の実測及び遺物の取り上げに用いた地区名については、国土座標第VI系をもとに大阪府発行新版(1984年建設省国土地理院承認)の1/2500地形図に示された500m区画の呼称を踏襲した。これを100m区画に割って、北西端から東へ01~25の番号を与え、さらにこれを縦横それぞれ4m毎に細分(25等分)してA~Yの記号で示した。これによってできた4mの区画に対してAA, ABというように表現している。本書で主に報じる部分は、大C-3-12-L24、大C-3-8-D04の各地区内に所在している。

遺構の種類は、本協会が定めた略号を用いており、本書に關係する略号の意味は下記の通りである。

建物	OB	溝	OS
ピット	OP	その他・不明	OX
土坑	OO		



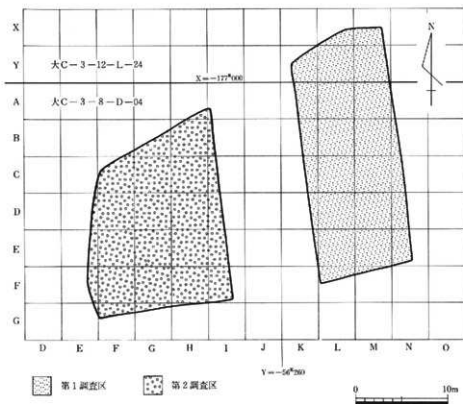
第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

大C-3-12	I	J	K	L
大C-3-8	A	B	C	D
	E	F	G	H
	I	J	K	L

500mの区画

大C-3-12					
-L	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25
大C-3-8					
-D	01	02	03	04	05
	06	07	08	09	10
	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25

100mの区画



第3図 地区割図

第II章 位置と環境

三ヶ山西遺跡は、行政区画でいえば貝塚市三ツ松に所在する。その位置は、府道牛滝貝塚線をほぼ南北の中心線とし、水間鉄道の三ヶ山口駅から北へ約100mの地点を中心とする東西約450m、南北約750m範囲に存在する周知の遺跡と認知されている。今回の調査区は、遺跡の範囲からいえば南部付近にあたる。

本遺跡の所在する貝塚市は、泉南と呼ばれる大阪府南部地方に所在する。本遺跡は、和泉山脈を源とする七山丘陵と近木川を西側に、同じく東側を、三ヶ山丘陵に挟まれた幅約2.5km、長さ約3.5kmの木島谷と呼ばれる地域に位置している。そして、そのほぼ谷奥部付近の近木川右岸の標高約65mから約70mを跨る中段段丘上に、本遺跡は立地している。

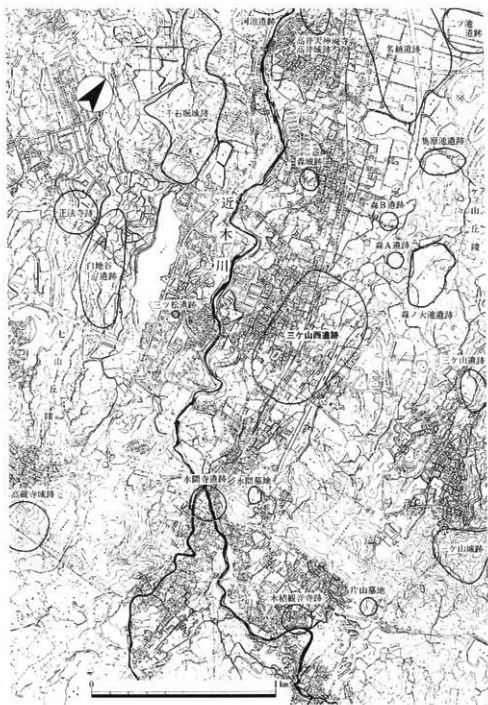
貝塚市域の遺跡及びその立地に関しては、貝塚市史や既述の報告書などによって述べられているとおりであるため、大筋については省略し、今回の調査で検出した遺構・遺物の大半の時期である6世紀末から7世紀初頭及び中世における遺跡の概略を記載する。

6世紀末から7世紀初頭の前段階である6世紀後半には、海岸縁辺部から中段段丘の前面部付近に存在する遺跡が多い。畠中遺跡、脇浜遺跡、半田遺跡、堀遺跡、石才南遺跡などを挙げることができ、6世紀中葉に比べると集落址が増える傾向にある。

それに続く本遺跡で検出した6世紀末から7世紀初頭にかけての遺跡は、海岸縁辺部および中段段丘の前面部から段丘の内部に部分的に入り込む状況が認められ、本遺跡以外に清見遺跡、森B遺跡などを挙げる事が出来る。なお、海岸縁辺部、段丘の前面部付近にも引き続いて遺跡は存在し、畠中遺跡、半田遺跡、堀遺跡などが知られている。

中世には、耕作上及び床土層の中から、遺物が細片ながら普遍的に出土していることから、土地開発が段丘全体に及び、集落が広く散在していたことを示している。

これらの遺跡としては、掘立柱建物を検出した地藏堂廃寺遺跡、王子遺跡、瀬池遺跡、畠中遺跡などを挙げる事が出来る。本遺跡の南に所在する水間寺遺跡もその時期にあたるものと推定している。また、森B遺跡では、荒廃した耕地の再開発を想定出来る遺構を検出している。14世紀以降になると、積善寺城跡、森城跡などの在地土豪層の手による中世城郭が出現する。更に16世紀以降、貝塚寺内町をはじめ、沢城跡、高井城跡、千石堀城跡、三ヶ山城跡が新たに加わる。これらは、文献史料によると全国統一を進める秀吉に対する根拠、雑質東側の地元土豪層を含んだ防護拠点であったことが知られている。



第4図 周辺の遺跡図 (S=1/20000)

第三章 調査の成果

第1節 基本層序

今回の調査で検出した遺構は、中位段丘の構成層であるにぶい黄灰褐色粘質土層（第Ⅴ層）上面で検出した。以下、確認した遺構を基本とする層序（第5図、図版2-2）を記載する。

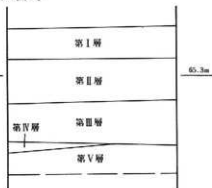
第Ⅰ層 上面がT.P.+65.7mからT.P.+66.0m前後に存在する。褐灰色砂質土層を基本とする層で、現耕土層である。層厚は、約0.2mから約0.3mを測る。

第Ⅱ層 上面がT.P.+65.4mからT.P.+65.7m前後に存在する。床上層で、明黄褐色粘質砂土層を基本とするが、部分的に数層に分けることが出来る。層厚は、約0.2mから約0.4mを測る。

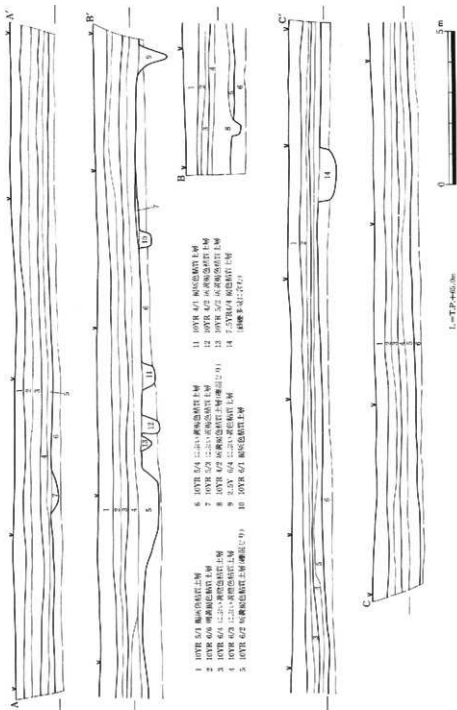
第Ⅲ層 上面がT.P.+64.9mからT.P.+65.3m前後に存在する。水田造成時の整地土と推定している層である。層中には、瓦器などの中世の遺物を多量に含む。灰褐色砂質土層を基本とする層で、層厚は、約0.2mから約0.3mを測る。

第Ⅳ層 上面がT.P.+64.9m前後に存在する。下層に存在する第Ⅴ層上面で検出した遺構の埋土と同様な土質、色調をしているため、第3遺構面（6世紀末から7世紀初頭）の遺物包含層と推定しているが、層中からは、全く遺物が出土しなかった。水田造成時及びそれ以前に削平をうけたものと推定され、層は第2調査区の一部に残存しているのみであった。灰褐色粘質土層を基本とする層で、最大厚0.05mを測る。

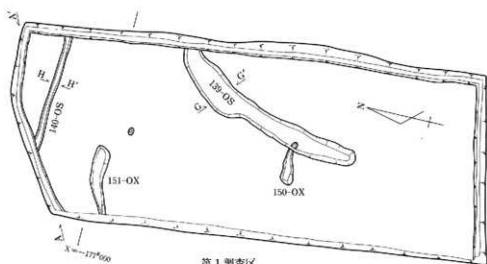
第Ⅴ層 上面がT.P.+64.9mからT.P.+65.1m前後に存在する。本調査区で検出した遺構の基盤層である。上層は、にぶい黄灰褐色粘質土層を基本とし、その下層には、褐色粘土層ないし褐色砂礫層が堆積している。



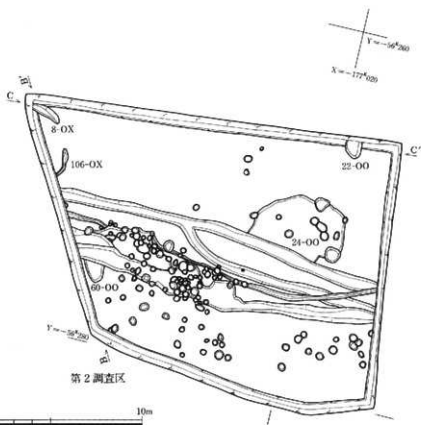
第5図 基本層序柱状図 (S=1/20)



第 6 圖 調查区土層断面圖 (S=1/120)



第1調査区



第2調査区

第7図 遺構配置図 (S=1/200)

第2節 遺構と遺物

概要（第7～9図、図版1・2-1・3）

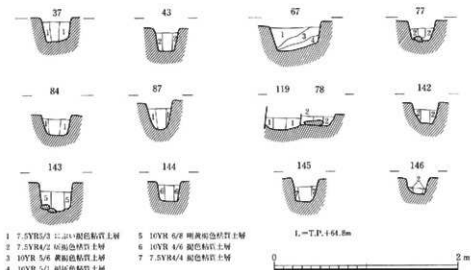
遺構は、T.P. +64.9m前後の第V層の上面で検出した。その上層には、ほぼ調査区全面に第III層が存在する。第III層は、当初第V層で検出した遺構の遺物包含層と思われたが、遺構の埋土とかけ離れた、土質、色調を呈していたことや、検出した遺構が、第1調査区の139-O Sの1例を除いて、第III層から出土した遺物の時期ではなかったことから、水田造成時の整地土と判断した。

遺構は、第2調査区において大半が検出され、第1調査区では、わずかであった。大半の遺構の時期は、少量ながら出土している遺構内の出土遺物から6世紀末から7世紀初頭と推定している。

今回の調査で検出した遺構は、建物2棟、ピット群、溝状遺構6条、土坑4基、不明落込み4基などである。

ピット群（第8～10図、図版3-2・4-1, 4～10）

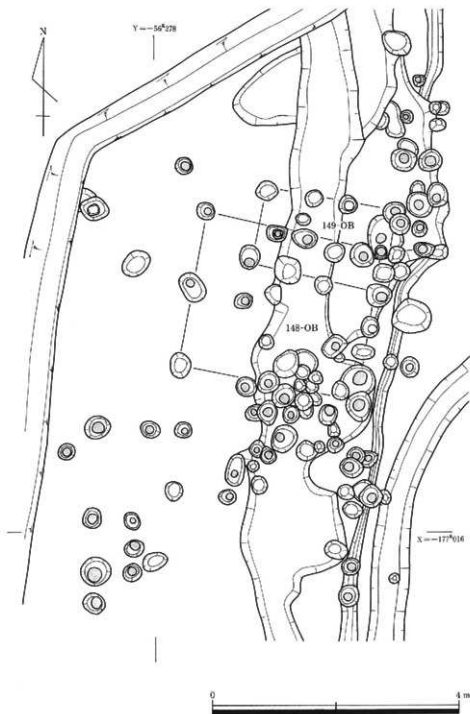
第2調査区において多量に検出した。ピットのほとんどは、第2調査区の1-O S西側に集中し接して存在している。その箇所には、5-O Sが切り合い、土層断面及び遺構検出面での平面観察の結果、それより古いものが大半である。このことから、遺構の検出に努めたが、欠失しているピットも何個かは存在していたものと思われる。



第8図 ピット断面図 (S=1/40)

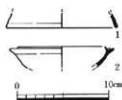


第9図 第1調査区遺構対照番号図 (S=1/100)



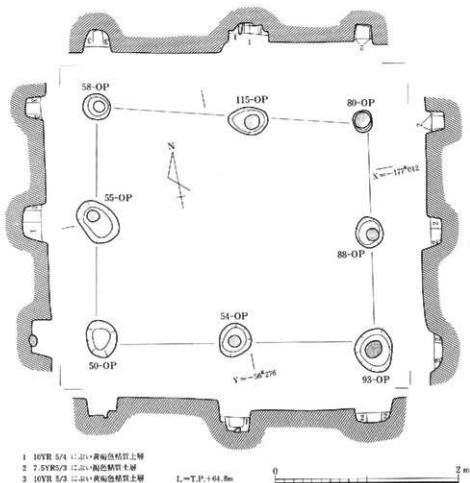
第10図 ビット群平面図 (S=1/60)

柱穴の径は、比較的小規模で大半が約0.2mから約0.3mを測り、大きくても約0.5m程度のものである。深さは、約0.1mから約0.4mを測る。ピットの中には、平面及び上層断面観察の結果、ほとんどのものに柱痕を確認したが、認められないものもある。また、ピット底に根石を持つものもある。



第11図 77-OP出土遺物
(S=1/4)

67・131・141-OPの各ピット内から、須恵器、土師器などの土器の細片が若干量出土したが、図化出来たのは、77-OPより出土した6世紀末から7世紀初頭にかけての須恵器2点(第11図)のみである。埋土の状況などから他のピットもその時期であるものと推定している。



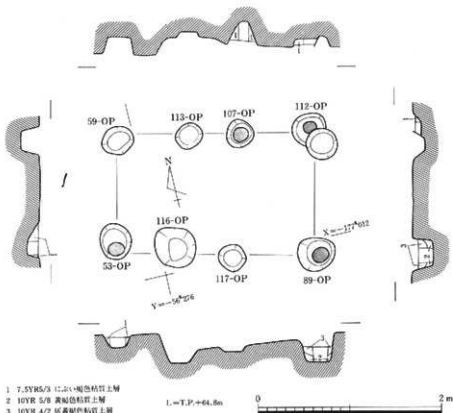
第12図 148-OB平面・断面図 (S=1/40)

建物（第10図）

ピット群は、平面的にとらえると、南北方向に並ぶ列が3列、東西方向にも4列存在している。それらのピット群は、集中し控して多数存在しているため、同一地点において時期の異なる何棟かの建物が存在しているのか、または、棚列群であるのかは調査面積が小規模であったため、現時点では不明な点が多い。

しかし、それらのピット列を建物に伴う柱穴として捕えると、何棟かの建物が建つ可能性が認められた。これらのピット列を調査時及び整理の時点において、比較検討した結果、小規模な2棟の建物を復元した。これらの外に、何棟かの建物が建つものと思われるが、現時点では不明な点が多い。

148-O B（第12図、図版5） 第2調査区北西側 $X = -177^{\circ}01'25''$, $Y = -56^{\circ}27'45''$ 付近に存在する、2間×2間の建物である。柱間は、約1.2mから約1.8m、柱穴の径は、約0.3mから約0.5m、深さは約0.2mから約0.4mを測る。柱穴内からは遺物は出土し



第13図 149-O B平面・断面図 (S=1/40)

なかった。

149-OB (第13図、図版4-2) 第2調査区北西側 $X=-177^{\circ}011$, $Y=-56^{\circ}275$ 付近に存在する、1間×3間の建物である。柱間は、約0.7mから約1.4m、柱穴の径は、約0.3mから約0.5m、深さは約0.1mから約0.3mを測る。

柱穴内からは、遺物は出土しなかった。

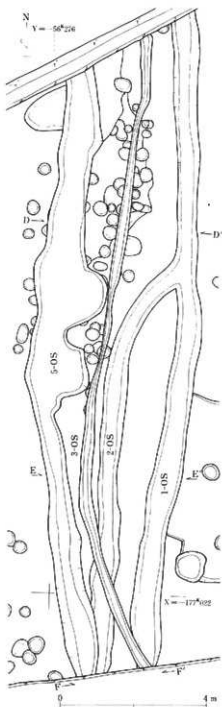
溝状遺構 (第14図、図版3)

第1調査区において2条、第2調査区において4条検出した。溝内の出土遺物からこれらの溝は、第1調査区で検出した中世と推定される139-OSを除き、6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと思われる。

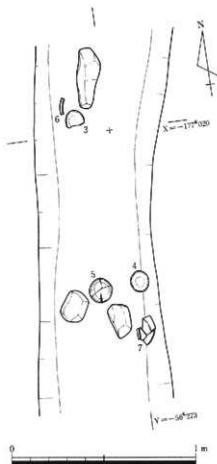
第2調査区においては、幅約2.5mの範囲に4条の溝(1-OS、2-OS、3-OS、5-OS)が、接しあるいは切り合っており調査区の中央部を南北方向に延びていることから、溝の掘り直しが行われたものと推定される。

1-OS・2-OS (第14・15・17図、図版6-1, 2) 第2調査区に存在する。1-OSは、南側が $X=-177^{\circ}0239$, $Y=-56^{\circ}273$ 付近、北側が $X=-177^{\circ}006$, $Y=-56^{\circ}272$ 付近で両側とも、調査区外に延びる溝である。調査区の $X=-177^{\circ}014$, $Y=-56^{\circ}273$ 付近で、調査区南辺の $X=-177^{\circ}0242$, $Y=-56^{\circ}2747$ 付近から約0.8m離れてほぼ平行に延びていた2-OSが、合流している。

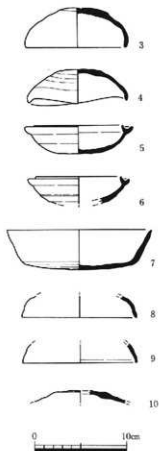
1-OSは、幅約0.7m、深さ約0.25m、2-OSは幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。両溝とも埋土中層には、約0.1m程度の砂の堆積が認められることから、水が流れていたものと推定される。



第14図 第2調査区溝群平面図
(S=1/100)



第15図 1-O S遺物出土状況図(S=1/20)



第16図 1.2-O S出土遺物(S=1/4)

また、調査区両端の溝底の深さの違い及び地形から、両溝は、南から北へ水が流れていたものと推定している。

溝内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器（第16図）、土師器が出土している。特に1-O Sの南側X=-177°021, Y=-57°2735付近においては、須恵器（坏蓋、坏身）5点（第16-3~7図、図版8-3~7）が、集中して出土（第15図、図版6-1, 2）している。

3-O S（第14・17図） 第2調査区に存在する。溝は南側がX=-177°0239, Y=-56°273付近、北側がX=-177°0068, Y=-56°2735付近で両端側とも、調査区外に延び、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。

平面及び土層断面観察の結果、溝は、1・2-O S及びピット群を切って存在していることから、それらよりは新しいことがわかった。

溝内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土したが図化出来なかった。

5-OS (第14・17図、図版7-3)

第2調査区に存在する。溝は、南側が $X = -177^{\circ}0242$, $Y = -56^{\circ}2749$ 付近、北側が $X = -177^{\circ}0079$, $Y = -56^{\circ}2752$ 付近で両端側とも、調査区外に延びる。 $X = -177^{\circ}017$, $Y = -56^{\circ}276$ 付近から北側は、溝がピット群よりも新しいことから、水流により両肩部が削平を受けたものと推定され、乱れている。幅約0.5mから約2.0m、深さ約0.15mを測る。

溝内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器 (第18図、図版6-3~5, 8-11

~16) が出土している。

139-OS (第7・17

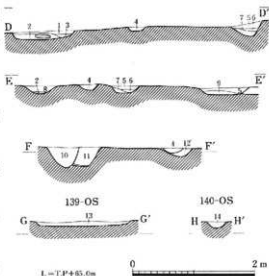
図、図版3-1・7-4)

第1調査区に存在する。今回の調査区において唯一中世と推定される遺構である。

溝は、調査区東辺の $X = -177^{\circ}004$, $Y = -56^{\circ}248$ 付近からほぼ等高線に沿って三日月状に延び、調査区南側 $X = -177^{\circ}01$

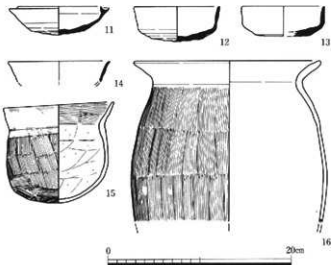
35, $Y = -56^{\circ}252$ 付近で終息する。幅約1.6m、深さ約0.1mを測る。

図化は出来なかったが、溝中より、瓦器、土師器、須恵器の細片が少量出土している。

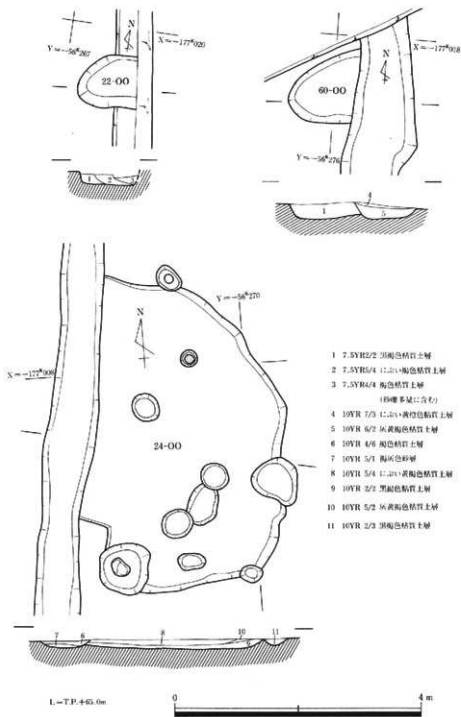


- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 10YR 7/3 にごい黄褐色粘土層 | 8 10YR 7/2 にごい黄褐色粘土層 |
| 2 10YR 6/2 灰褐色粘土層 | 9 10YR 5/1 灰褐色砂層 |
| 3 10YR 5/3 にごい黄褐色粘土層 | 10 7.5YR4/4 褐色粘土層 |
| 4 10YR 6/3 にごい黄褐色粘土層 | 11 7.5YR4/6 褐色粘土層 |
| 5 10YR 4/6 褐色粘土層 | 12 7.5YR3/2 褐色粘土層 |
| 6 10YR 6/1 褐色粘土層 | 13 2.5Y 5/4 黄褐色粘土層 |
| 7 10YR 5/3 にごい黄褐色粘土層 | 14 2.5Y 7/6 明黄褐色粘土層 |

第17図 溝土層断面図 (1/60)



第18図 5-OS 出土遺物 (S=1/4)



第19圖 土坑平面・断面圖 (S=1/60)

140-O S (第7・17図、図版3-1・7-5) 第1調査区の北側にあり、溝の両端とも調査区外に延びる。東端側が、 $X=-176^{\circ}9960$, $Y=-56^{\circ}249$ 付近、西端側が $X=-176^{\circ}996$, $Y=-56^{\circ}256$ 付近にあり、東西方向に延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。溝内からは、遺物は全く出土しなかったが、埋土の色調及び土質から6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと推定している。

土坑 (第19図)

第2調査区において3基の土坑を検出している。土坑内の出土遺物から時期は、いずれも6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと推定している。

22-O O (第19図、図版7-7, 8) 第2調査区の南東端 $X=-177^{\circ}021$, $Y=-56^{\circ}2665$ 付近に存在し、土坑の東側は調査区外にある。平面形では楕円形を呈するものと推定され、長径1.0m以上、短径約0.8m、深さ約0.2mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

24-O O (第19図、図版7-6) 第2調査区の南東側 $X=-177^{\circ}019$, $Y=-56^{\circ}271$ 付近に存在し、土坑の西側は1-O Sに切られている。平面形では楕円形に近い形を呈する。長径約5.0m、短径約3.0m以上を測る。土坑底は、ほぼフラットな面をなしており、深さ約0.15mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

60-O O (第19図) 第2調査区の北西端 $X=-177^{\circ}009$, $Y=-56^{\circ}276$ 付近に存在する。東側が5-O Sによって切られており、平面形では楕円形を呈するものと推定される。長径1.0m以上、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

その他の遺構 (第7図)

第V層上面で検出した、第1調査区の150・151-O X、第2調査区の8・106-O Xは、遺構の埋土が他の遺構のものと、ほぼ同様な色調、土質を呈しているが、遺構の断面が急激にV字状に深く落ち込んでいること、埋土からは、全く遺物が出土しなかったこと、また、第V層の下層に同系統の土が堆積していることなどから、第V層形成時のものである可能性が高いと判断している。

140-OS (第7・17図、図版3-1・7-5) 第1調査区の北側にあり、溝の両端とも調査区外に延びる。東端側が、 $X=-176^{\circ}9960$, $Y=-56^{\circ}249$ 付近、西端側が $X=-176^{\circ}996$, $Y=-56^{\circ}256$ 付近にあり、東西方向に延びる溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。溝内からは、遺物は全く出土しなかったが、埋土の色調及び土質から6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと推定している。

土坑 (第19図)

第2調査区において3基の土坑を検出している。土坑内の出土遺物から時期は、いずれも6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと推定している。

22-OO (第19図、図版7-7, 8) 第2調査区の南東端 $X=-177^{\circ}021$, $Y=-56^{\circ}2665$ 付近に存在し、土坑の東側は調査区外にある。平面形では楕円形を呈するものと推定され、長径1.0m以上、短径約0.8m、深さ約0.2mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

24-OO (第19図、図版7-6) 第2調査区の南東側 $X=-177^{\circ}019$, $Y=-56^{\circ}271$ 付近に存在し、土坑の西側は1-OSに切られている。平面形では楕円形に近い形を呈する。長径約5.0m、短径約3.0m以上を測る。土坑底は、ほぼフラットな面をなしており、深さ約0.15mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

60-OO (第19図) 第2調査区の北西端 $X=-177^{\circ}009$, $Y=-56^{\circ}276$ 付近に存在する。東側が5-OSによって切られており、平面形では楕円形を呈するものと推定される。長径1.0m以上、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。

土坑内からは、6世紀末から7世紀初頭と推定される須恵器、土師器の細片が少量出土しているが、図化出来るものはなかった。

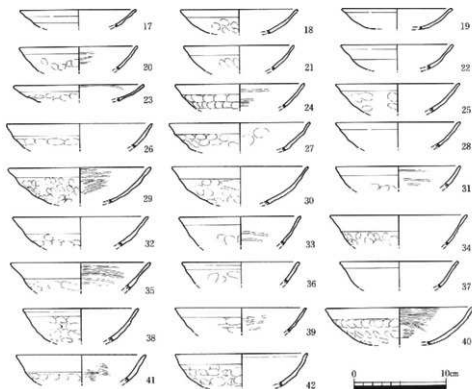
その他の遺構 (第7図)

第V層上面で検出した、第1調査区の150・151-OX、第2調査区の8・106-OXは、遺構の埋土が他の遺構のものと、ほぼ同様な色調、土質を呈しているが、遺構の断面が急激にV字状に深く落ち込んでいること、埋土からは、全く遺物が出土しなかったこと、また、第V層の下層に同系統の土が堆積していることなどから、第V層形成時のものである可能性が高いと判断している。

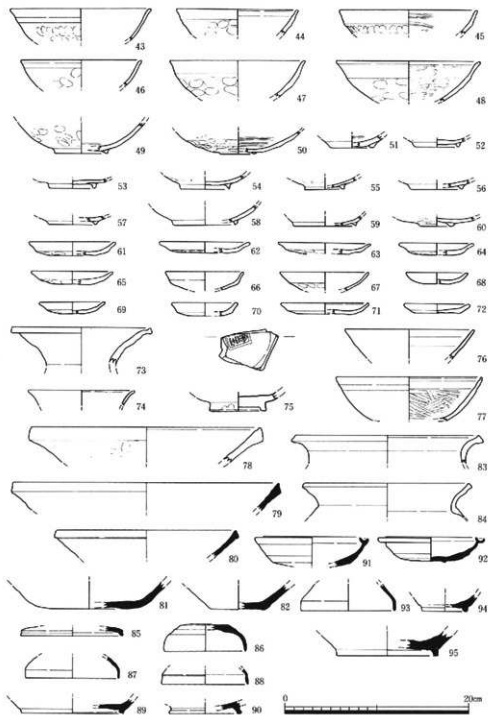
第3節 第Ⅲ層出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、第Ⅲ層内からのもの(第20・21図、図版9・10)が、大半を占めている。遺物の種類は、瓦器、須恵器、土師器、黒色土器、磁器などの土器で、その中でも瓦器が極めて多く出土している。出土した瓦器の時期は、12世紀後半のものから認められ13世紀後半まで続いているものと推定される。

第Ⅲ層は、第Ⅳ層で検出した遺構の埋土とはかけ離れた、土質、色調を呈していたため、また、第Ⅲ層に伴うと推定される遺構が、139-O Sの1例を除いて検出されなかったことから、水田造成時の整地上の可能性が大であると判断した。しかし、整地上層にかかわらず、層中より多量の遺物が出土していることから、遺跡を遺物包含層及び遺構の埋土を掘削したものと推定している。遺物の出土量から、土砂を採取した場所は、大規模な集落址であった可能性が高い。そして、出土遺物から13世紀後半以降に当該地に運ばれ、水田造成に使用されたものと推定している。



第20図 第Ⅲ層出土遺物Ⅰ (S=1/4)



第21図 第III層出土遺物2 (S=1/4)

第Ⅳ章 まとめ

今回の発掘調査は、調査面積が約620㎡と小規模にもかかわらず、その地域周辺では極めて数少ない本格的調査であり、調査結果から周辺の遺跡の状況を推定出来る資料を得ることが出来た。以下、その調査成果を記述する。

当初の試掘調査結果では、遺構面上層に存在する第Ⅲ層中に多量の瓦器などの中世の遺物が出土したこと、また、周辺の遺跡の状況から、中世の遺跡の可能性が高いものとされていた。しかし、今回の調査の結果、中世の遺構はほとんど検出されず、6世紀末から7世紀初頭にかけての遺構が大半であった。

検出した遺構は、第2調査区に集中し、建物、ピット群、溝などである。第1調査区では、溝など極少数の遺構が検出されたのみであった。検出した遺構の時期は、1例を除き6世紀末から7世紀初頭にかけてのものである。この周辺での発掘調査がほとんど行われていないため不明な点が多いが、当該期の遺構の検出は、今回が初めてで、この時代には、木島谷の奥部付近まで部分的ではあるが、開発が及んでいたことを示している資料であるといえる。検出状況から当該期における遺構の範囲は、第2調査区の東辺を境にして西南へと広がる可能性が高いものと推定している。

中世の遺構は、ほとんど検出されなかったが、第Ⅲ層中から多量の瓦器などの遺物が出土した。第Ⅲ層は、調査結果から水田造成時の整地土層の可能性が高いものと判断している。そしてその整地土は、周辺の極近い地域より運ばれてきたものと考えられ、このことから、当該地周辺には、大規模な中世の遺跡が存在していたものと推定している。

これらのことを裏付ける資料としては、調査区の南約700mに『水間寺』がある。そして当該地周辺は、『門跡』という小字名が残っていることから、門が建っていた可能性が高い。そのことは、『水間寺』の寺域がこの周辺にまで及んでいたものと推定される。今回の調査では、これらに関する遺構は全く検出されていないが、多量に出土した中世の遺物は、当該期における『水間寺』に何らかの関係があるものと推定している。そしてこれらの遺物は、遺構には伴わないで出土しているため、寺関係のものか、周辺に存在していたと推定される門前町のものであるのかは、今の所判断出来ないが、周辺の中世の状況を知るうえで重要な手掛かりになる資料であるといえよう。

以上のように、今回の調査によって数々の新知見が明らかとなった。今後の調査研究によって、これらの時代の周辺の状況が明らかになってくることを期待したい。

出土遺物計測値表

出土遺物計測値表凡例

- [遺物番号] 本文・写真を統一した。
- [器種・器型] 一般的な分類・名称を用いた。
- [法量] 一般的な部分名称を用いた。器高欄については、全体の器形が表現できないものについては残存高、また、口径及び脚径が一部のみ残存しているものについては、記載はしていないが推定で表している。
- [胎土] 肉眼による識別で全体の粗密度合と最大径を測る含有物とその法量を記した。
- [色調] 土器は外面、内面、断面では相当異なる色調を呈することが多いが、ここでは、比較的焼成時に変化を受けていないと思われる内面の色調を記載した。色調同定には『標準土色帖』を使用し、JISnotationで表現した。
- [出土地点] 地区割図、基本層序名・遺構名に基づき記載した。地区名については、地区割名の頭の部分が同一であることから、大C-3-□□までを省略して記載した。つまり、表記している『08-D04EG』は、『大C-3-08-D04EG』の地区名となる。
- [焼成] 肉眼による識別で、焼成の良好な順から堅緻、良好、不良との3種類に分けた。

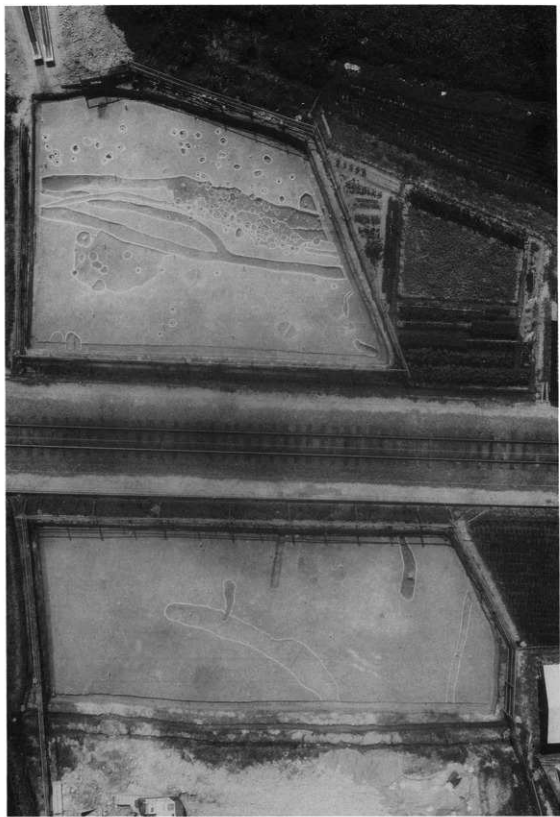
遺物番号 (頁)	地区名	遺構・部位	階級	形状	計量(㎝)		内容	土質	状況	備考	
					口径	高さ					
1(12)	08-D08EG	77-OP	築物部	坪	蓋	13.0	1.6	—	0.5m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	3Y 8/1
2(12)	08-D08EG	77-OP	築物部	坪	身	9.4	2.3	—	0.5m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	7.5Y 7/1
3(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	蓋	11.2	4.3	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0
4(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	蓋	10.6	3.9	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0
5(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	身	9.6	3.1	—	0.5m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	N 8/0
6(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	身	9.2	2.9	—	1m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	N 7/0
7(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	身	15.8	4.5	—	3m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	N 8/0
8(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	蓋	12.1	2.3	—	3m以下の石炭・灰石、黒色砂	良好	N 7/0
9(15)	08-D08EG	1-OS	築物部	坪	蓋	12.4	2.1	—	1m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0
10(15)	08-D08EG	2-OS	築物部	坪	蓋	—	1.4	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 8/0
11(16)	08-D08EG	5-OS	築物部	坪	身	8.9	3.2	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0
12(16)	08-D08EG	5-OS	築物部	坪	身	9.2	3.8	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0
13(16)	08-D08EG	5-OS	築物部	坪	身	8.8	3.2	—	1m以下の石炭・灰石	良好	5PB 7/1
14(16)	08-D08EG	5-OS	築物部	坪	身	11.0	2.2	—	1m以下の石炭・灰石	良好	N 6/0
15(16)	08-D08EG	5-OS	土層部	鉢	鉢	11.8	11.6	—	1m以下の石炭・灰石等物	良好	7.5Y R7/4
16(16)	08-D08EG	5-OS	土層部	溝	溝	19.7	17.3	—	4m以下の石炭・灰石等物	良好	10Y R 8/2
17(19)	08-D08FG	築台部	瓦葺	椽	12.3	1.9	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 8/1	
18(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	12.1	2.6	—	1m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 8/1	
19(19)	08-D08DM	築台部	瓦葺	椽	11.7	2.3	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	10Y R 3/1	
20(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	12.7	2.6	—	0.5m以下の石炭・灰石	良好	N 5/0	
21(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	11.8	2.7	—	1m以下の石炭・灰石	不良	N 4/0	
22(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	11.8	2.7	—	3m以下の石炭・灰石	不良	N 4/0	
23(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	14.9	1.8	—	1m以下の石炭・灰石	良好	N 5/0	
24(19)	08-D08AM	築台部	瓦葺	椽	13.8	2.7	—	2m以下の石炭・灰石	良好	10Y 5/1	
25(19)	08-D08AH	築台部	瓦葺	椽	13.1	3.1	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	5Y 4/1	
26(19)	08-D08AM	築台部	瓦葺	椽	15.6	2.7	—	2m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 3/1	
27(19)	08-D08SH	築台部	瓦葺	椽	15.0	3.1	—	3m以下の石炭・灰石	良好	N 7/0	
28(19)	08-D08AH	築台部	瓦葺	椽	13.4	2.7	—	3m以下の石炭・灰石	不良	10Y R 8/2	
29(19)	08-D08FM	築台部	瓦葺	椽	15.3	3.9	—	1.5m以下の石炭・灰石	不良	2.5Y 7/1	
30(19)	08-D08EI	築台部	瓦葺	椽	14.6	4.1	—	0.5m以下の石炭・灰石	良好	5Y 8/1	
31(19)	08-D08CG	築台部	瓦葺	椽	13.4	2.4	—	1.5m以下の石炭・灰石	良好	5Y 4/1	
32(19)	08-D08AM	築台部	瓦葺	椽	14.6	3.2	—	2m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 5/1	
33(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	13.9	3.2	—	1.5m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 7/1	
34(19)	12-12HVL	築台部	瓦葺	椽	14.8	3.3	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 5/1	
35(19)	08-D08AM	築台部	瓦葺	椽	15.9	3.0	—	1m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 5/1	
36(19)	08-D08AK	築台部	瓦葺	椽	12.6	2.4	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	2.5Y 8/1	
37(19)	08-D08EF	築台部	瓦葺	椽	12.8	2.9	—	1.5m以下の石炭・灰石	不良	5Y 8/1	
38(19)	08-D08CH	築台部	瓦葺	椽	12.4	3.6	—	1.5m以下の石炭・灰石	不良	5Y 5/1	
39(19)	08-D08EF	築台部	瓦葺	椽	14.0	2.7	—	0.5m以下の石炭・灰石	良好	N 5/0	
40(19)	08-D08BK	築台部	瓦葺	椽	15.9	4.0	—	2.5m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 2/1	
41(19)	08-D08AM	築台部	瓦葺	椽	13.9	3.0	—	3m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 4/1	
42(19)	08-D08EG	築台部	瓦葺	椽	14.2	3.6	—	3m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 5/1	
43(20)	08-D08CF	築台部	瓦葺	椽	14.9	3.6	—	1m以下の石炭・灰石	不良	2.5Y Y2/1	
44(20)	08-D08CF	築台部	瓦葺	椽	13.1	2.8	—	1m以下の石炭・灰石	不良	5Y 4/1	
45(20)	08-D08CK	築台部	瓦葺	椽	14.7	2.7	—	1m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 4/1	
46(20)	08-D08CF	築台部	瓦葺	椽	13.9	3.0	—	0.5m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 4/1	
47(20)	08-D08DG	築台部	瓦葺	椽	14.5	4.0	—	0.5m以下の石炭・灰石	良好	10Y R 8/1	
48(20)	08-D08CH	築台部	瓦葺	椽	15.5	4.3	—	1m以下の石炭・灰石	不良	7.5Y 4/1	

表1 遺物計測値表1

遺物番号 (表)	地区名	遺構・部位	器種	器形	法 量 (g)			胎 土	焼 色	調 剤	備考
					口径	高さ	底径				
49(20)	08-D03FH	竪田層	瓦 葺	焼	—	3.4	0.7	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	7.5Y 7/1	
50(20)	08-D03EH	竪田層	瓦 葺	焼	—	2.5	2.8	0.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	5Y 5/1	
51(20)	08-D03CG	竪田層	瓦 葺	焼	—	0.7	4.7	1.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
52(20)	08-D03DG	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.3	4.6	3 以下の花瓦・灰瓦	不良	10Y 4/1	
53(20)	08-D03EJ	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.0	4.9	2 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
54(20)	08-D03EK	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.5	5.3	1 以下の花瓦・灰瓦	不良	10YR 6/2	
55(20)	08-D03EG	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.3	4.2	1 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 5/1	
56(20)	08-D03EK	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.1	5.4	0.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
57(20)	08-D03DM	竪田層	瓦 葺	焼	—	0.9	4.8	1 以下の花瓦・灰瓦	不良	N 3/0	
58(20)	08-D03FP	竪田層	瓦 葺	焼	—	2.1	6.4	0.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	10Y 4/1	
59(20)	08-D03FG	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.1	6.7	0.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
60(20)	08-D03EH	竪田層	瓦 葺	焼	—	1.1	3.7	2.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	2.5Y 6/3	
61(20)	08-D03BK	竪田層	瓦 葺	小皿	9.4	1.5	—	1.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
62(20)	08-D03EH	竪田層	瓦 葺	小皿	9.6	1.2	—	2.5 以下の花瓦・灰瓦	不良	5Y 5/1	
63(20)	08-D03DK	竪田層	瓦 葺	小皿	9.8	1.2	—	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	7.5Y 7/1	
64(20)	08-D03DG	竪田層	瓦 葺	小皿	7.8	1.3	—	1 以下の花瓦・灰瓦	不良	7.5Y 4/1	
65(20)	08-D03EG	竪田層	瓦 葺	小皿	8.6	1.1	—	1 以下の花瓦・灰瓦	不良	10Y 3/1	
66(20)	08-D03CF	竪田層	瓦 葺	小皿	8.2	2.0	—	2 以下の花瓦・灰瓦	不良	2.5G Y3/1	
67(20)	08-D03AM	竪田層	瓦 葺	小皿	9.5	2.0	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	7.5Y R1/1	
68(20)	08-D03EG	竪田層	土師器	小皿	6.5	1.2	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	2.5Y 6/3	
69(20)	08-D03CG	竪田層	土師器	小皿	7.0	1.3	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	10YR 6/1	
70(20)	08-D03EH	竪田層	土師器	小皿	7.0	1.4	—	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	5YR 7/4	
71(20)	08-D03CG	竪田層	土師器	小皿	7.4	1.2	—	1 以下の花瓦・灰瓦	良好	2.5Y R1/6	
72(20)	08-D03AL	竪田層	土師器	小皿	6.9	1.5	—	0.5 以下の花瓦・灰瓦 (3ヶ所)	良好	10YR 6/3	
73(20)	08-D03BL	竪田層	瓦 葺	蓋	14.8	4.2	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 1/0	
74(20)	08-D03AK	竪田層	白 磁	鉢	11.4	1.7	—	蓋	割破	N 8/0	口欠け
75(20)	08-D03FP	竪田層	青 磁	鉢	—	2.1	5.7	蓋	割破	2.5Y 8/1	継ぎ足
76(20)	08-D03AL	竪田層	白 磁	鉢	14.0	3.2	—	蓋	割破	N 8/0	
77(20)	08-D03GH	竪田層	褐色土器	鉢	15.6	4.7	—	1 以下の花瓦・灰瓦	良好	2.5G Y2/1	
78(20)	08-D03BK	竪田層	瓦 葺	鉢	21.7	3.8	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	10Y 4/1	
79(20)	08-D03HJ	竪田層	青磁器	鉢	26.6	3.0	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
80(20)	08-D03BK	竪田層	青磁器	鉢	19.3	3.0	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
81(20)	08-D03EH	竪田層	青磁器	鉢	—	3.0	7.8	6 以下の花瓦・灰瓦・褐色瓦	良好	7.5Y 6/1	
82(20)	08-D03EH	竪田層	青磁器	鉢	—	2.7	4.7	4 以下の花瓦・灰瓦・褐色瓦	良好	5Y 7/1	
83(20)	08-D03CG	竪田層	土師器	上蓋	19.8	3.1	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	5YR 6/6	
84(20)	08-D03CI	竪田層	土師器	蓋	17.7	3.7	—	4 以下の花瓦・灰瓦	良好	5YR 7/3	
85(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	坏 蓋	10.9	1.0	—	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	7.5Y 7/1	
86(20)	08-D03CF	竪田層	青磁器	坏 蓋	8.7	2.9	—	1 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 8/0	
87(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	坏 蓋	10.1	2.4	—	1.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
88(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	坏 蓋	8.2	1.7	—	1 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 6/0	
89(20)	08-D03FG	竪田層	青磁器	坏 身	—	1.6	11.0	1 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
90(20)	08-D03FP	竪田層	青磁器	坏 身	—	1.3	7.6	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 8/0	
91(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	坏 身	10.4	3.2	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
92(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	坏 身	9.6	2.7	—	2 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
93(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	蓋	9.9	2.3	—	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	
94(20)	08-D03EG	竪田層	青磁器	蓋	—	1.9	4.8	4 以下の花瓦・灰瓦・褐色瓦	良好	N 8/0	
95(20)	08-D03FP	竪田層	青磁器	蓋	—	3.7	11.0	0.5 以下の花瓦・灰瓦	良好	N 7/0	

表2 遺物計測値表 2

版 图

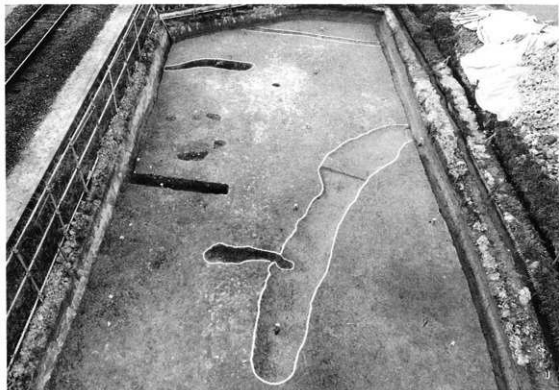




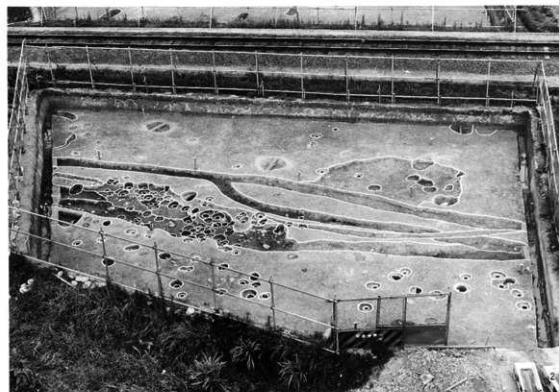
1. 調査区全景 (西から)



2. 調査区基本層序



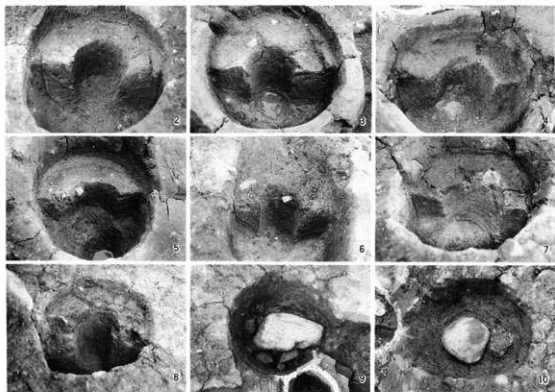
1. 第1調査区全景 (南から)



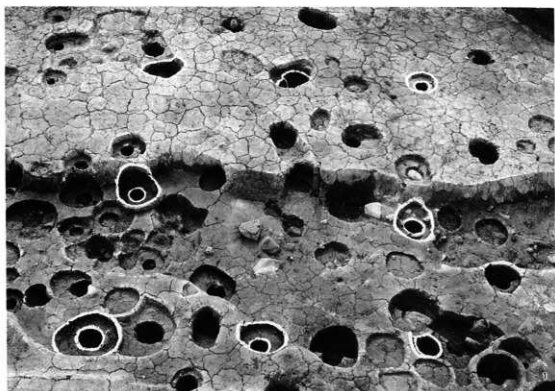
2. 第2調査区全景 (西から)



1. ピット群全景 (南から)



2. 149-OB (89-OP土層断面) 3. 84-OP土層断面 4. 77-OP土層断面
 5. 87-OP土層断面 6. 142-OP土層断面 7. 143-OP土層断面
 8. 144-OP土層断面 9. 78-OP根石検出状況 10. 154-OP根石検出状況



1. 148-OB全景(東から)



2



3



4

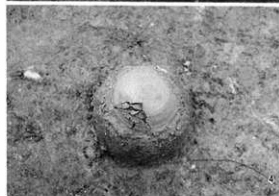


5

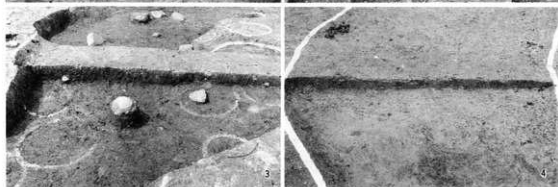
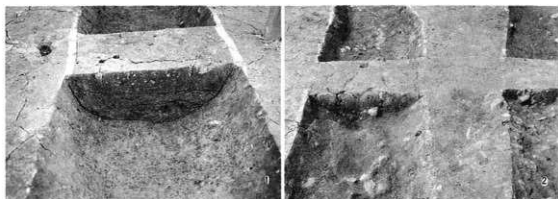
2. 148-OB (54-OP土層断面) 3. 148-OB (58-OP土層断面)
4. 148-OB (93・92-OP土層断面) 5. 148-OB (115-OP土層断面)



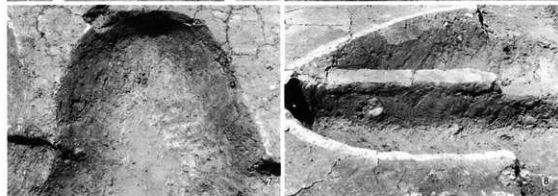
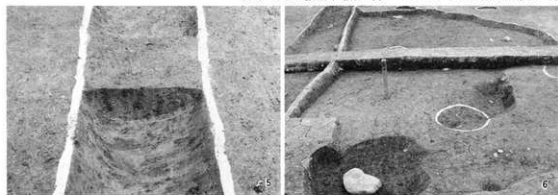
1. 1-OS遺物出土状況 (南から)



2. 1-OS遺物出土状況細部 (南から) 3. 5-OS遺物出土状況 (16)
4. 5-OS遺物出土状況 (11) 5. 5-OS遺物出土状況 (15)



1. 1-OS土層断面 (南から) 2. 2-OS土層断面 (南から)
3. 5-OS土層断面 (南から) 4. 139-OS土層断面 (南から)



5. 140-OS土層断面 (西から) 6. 24-00土層断面 (南から)
7. 22-00全 景 (東から) 8. 22-00土層断面 (南から)



4



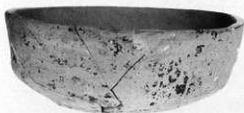
3



5



7



11



15



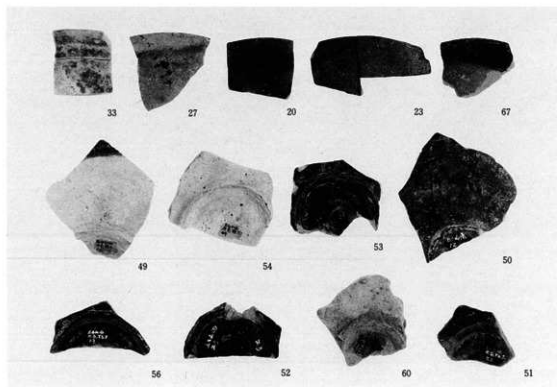
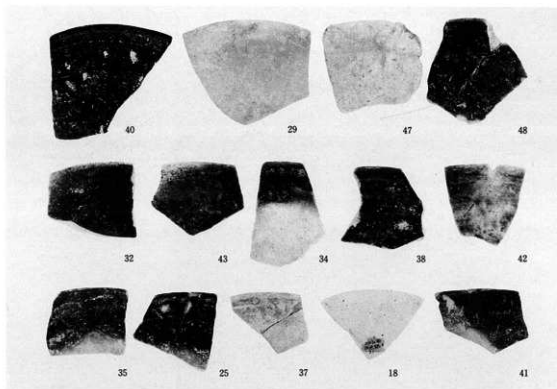
14

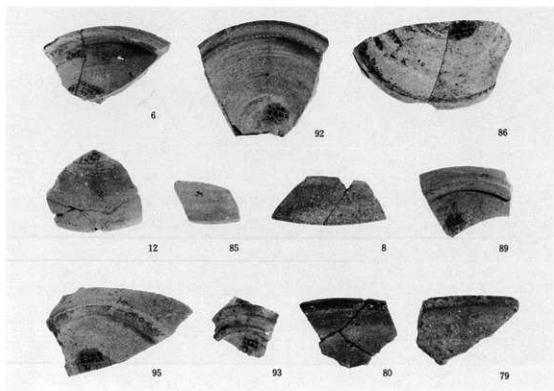
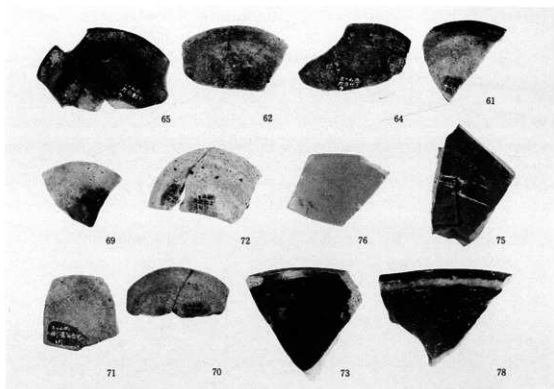


16



77





財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第62輯

三ヶ山西遺跡

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1991年1月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪府中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

